参院選を全力で闘おう！　東京からの発信

新社会党東京都本部副委員長　福田　実

はじめに

参院選（７月10日投票）が間近に迫っています。立憲野党にとって今回の命題は、３分の１以上の議席を確保し、改憲阻止の勢力を維持することです。しかし、簡単ではありません。連合の野党共闘への介入、国民民主党の与党化、維新の復活などに加え、ロシアのウクライナ侵攻などが影を落としています。こうした情勢の中で、東京でどう闘うのかが問われています。

１、東京の選挙情勢

⑴昨年、２０２１年の衆院選では東京の「市民と野党」共闘は健闘しました。それは17年と21年の議席数を比較すると解ります。小選挙区（25選挙区）では自民党は19→16議席へと減らし、立憲野党（立憲民主候補）は４→８議席、公明１→１議席となりました。（17年は希望の党が１議席有り）。

東京比例ブロック（定数17議席）では全国と同じ停滞状況で17年と比較すると自民６、立憲民主４、公明２、共産２は変わらず、17年の希望の党３議席が、維新２、れいわ１議席になり、維新の躍進を支えた形になりました。

⑵次に、参院選の16年、19年の結果を見てみます。２０１６年参院選東京選挙区（定数６）に当選した候補者は今度22年に改選を迎えるわけですが、16年の結果は自民２、立憲民主２、公明１、共産１議席で得票は最低ラインでも50万票でした。れいわや社民は候補者を出しましたが落選しています。

19年の結果、（定数６）は、自民２、立憲民主１、公明１、共産１、維新１で、立民の候補者が次点で敗れ、維新が当選しました。

⑶さて、今年22年夏の参院選の候補者の状況です。候補者はＮＨＫ党が多数出すことも有り予想では定数６議席を20人前後で争う選挙になると予想されています。自民・立憲は２議席を狙い、公明・共産は１議席維持を

山本太郎氏は発言したと報道されていますが、政党としての存在意義、さらに有権者１１５０万人の東京で候補者を擁立できなければ比例区票の押し上げが困難になるという政党の選挙戦略もあります。

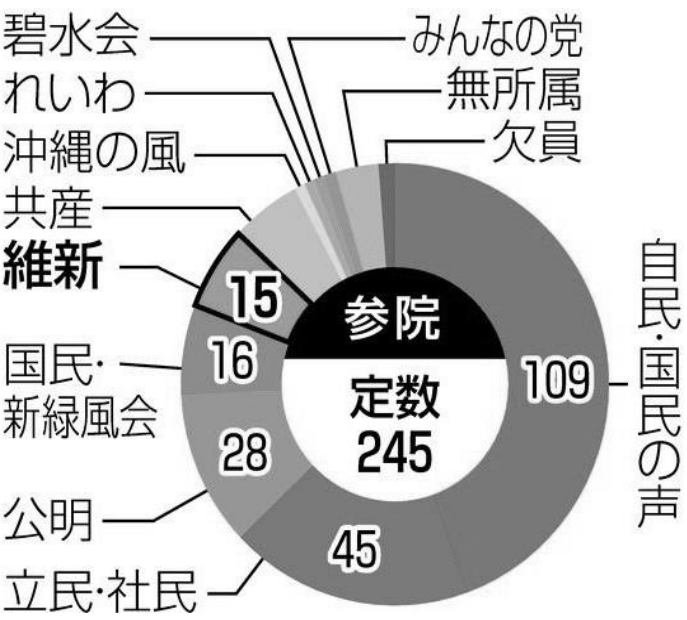
2、護憲の第３極の維持・前進を目指して
候補者の擁立に尽力

⑴さて、そうした位置を持つ参院東京選挙区に新社会党東京都本部は社民党の服部良一予定候補を推薦する予定です。東京では新社・社民・緑・共同テーブルの佐高信さんなどが衆院選後から無所属共同候補擁立のために10回以上の意見交換を重ねてきました。説得した対象者は10人弱に及びましたが擁立ができず、３党の党内からの擁立に転換しました。

⑵今次参院選は憲法を左右する重大な政治決戦であり、東京で擁立できなければ比例選挙に大きくマイナスになります。それは、新社会党にとってはおかざき彩子に負の影響を、緑は福島みずほを推薦し当選を期しています。社民党比例選挙を支えることは自らの問題だからでもあるからです。しかし、３党の党内でも難航し、最後は社民党内からとなった経緯があります。

⑶東京都本部執行部は、現状に危惧をいだき、首都東京狙い、さらに、維新、国民・都民ファースト、れいわ、社民の候補者などが予定されています。

⑷首都東京で、それも定数６議席で、「候補者を擁立できない政党は政党ではない（趣旨）」とれいわ新選組の



現在の参議院の各党勢力図

で明快に９条にたって平和を訴える候補を期待する各界の声に応えられる人物であれば、この間の努力の延長上の候補との判断をしています。

３、獲得目標を明確にする。次世代に引き継ぐ

⑴さて、選挙は候補者の勝利と共に、獲得目標を明確にする必要があります。その①は、23年統一自治体選挙等に向け新人候補者の発掘であり、現職は知名度や影響力の拡大（支持者名簿の拡大）です。②は、組織の活性化と拡大、機関紙の拡大。党の知名度・政策・影響力の拡大（有権者・労組・学識経験者へ）です。③特に、おかざき彩子さんの選挙ではロスジェネを中心に若者・女性への浸透を図りたいと考えています。

⑵どんな組織でも次世代に引き継ぐためには若者と女性の重視・活躍が欠かせません。東京都本部では今年の４月の第27回定期大会スローガンの１つに「新社会党を次世代に引き継ぐために組織・機関紙拡大をやり抜こう」を確認すると共に、40歳前後の委員長・書記長体制を誕生させることができました。

元々両名とも副委員長でありました。ただ、議員なのでそのフォロー体制を配慮することも必要と考えた体制になっています。その契機になった要因は何といっても、おかざき彩子さんの参院選予定候補者としての決意と行動を新委員長と書記長等が真剣に受け止めたからです。

⑶若者・女性の行動力は注目に値されるものがでてきました。それは去る５月８日の東京北区の街宣、５月12・13・14日の東京の駅頭、４回の彩子さんの集会に現れました。参加者数においても、弁士においても、青年・女性委員会メンバーが前面に出て活躍し、かつ、４回の集会にも集中力を発揮していました。

⑷ロスジェネは「超就職氷河期世代」「格差社会」と言われています。そしてジェンダー差別解消を求める声が大きくなる中で、その該当者である若い女性・おかざき彩子さんの決意が、東京の党を変革しつつある青年と女性の力をヒシヒシと感じます。

４、参院選の情勢

⑴野党共闘の成果を見る。

野党共闘以前の13年参院選では１人区31の内２選挙区でしか野党候補が勝利できませんでした。２０１６年参院選では、32の１人区全てで野党共闘候補の一本化に成功し、内11選挙区で野党統一候補が勝利を収めました。19年の参院選でも32の１人区の内10選挙区で

統一候補が勝ちました。その成果は明らかです。

⑵昨年21年の衆議院選は、岸田新総理による「ボロ隠し・ご祝儀相場中の今のうち解散」に「市民と野党」共闘は前進できませんでした。しかし、その共闘は現職の自民党幹事長や閣僚を敗北させ、石原伸晃氏を比例復活さえさせず、勇気づけられる成果も東京・神奈川などでは得られました。いま、日本共産党を含む野党共闘への攻撃が各方面から強まっていますが、野党共闘の真価はこれからも続くと思われますし、私たちは市民と野党の共闘を深化させなければなりません。

5、全国で戦いの準備はできているか？

私は様々な場で下記の事項を提起しています。

①自民党への信頼は大きくなく、小さいことです。自民党の絶対得票率は18％弱です。だから、倒せないことはないのです。

②野党と市民の共闘を「名実共に」成功させ、1人区では「候補者の一本化」を成功させること。その前提として、各立憲野党が地力を高めながら、選挙においても、日常活動においても「共闘の実績と信頼関係」をつくり、第2自民党的な「介入」（今回は維新等）を許さない体制をつくることです。

③野党が共闘し「勝てる」という「選択枝」を提供すれば、無党派層（リベラル層が多い）が投票に向かい、投票率が上がり、無党派層の支持を得ます。自民党の必勝戦略は低投票率と野党の分断なのです。

④客観的にある全国的な争点、地域的な争点を、自らの力で一層明確にすることです。つまり、客観的にある対立点を主体的な努力で有権者に対して可視化すること、と思います。

6、結語

「組織は、闘わなければ強くならない」と言います。主体的に闘わなければ、勝利の（敗北の）原因も自分のものになりません。また、汗を流して懸命に闘う姿が勤労国民の共感を得ます。全国各地で立憲野党の勝利に向けて、おかざき彩子さんの勝利に向けて、頑張っています。いまの憲法危機、生存の危機の情勢の中で精一杯頑張りましょう。そして総括し前進しましょう。

（ふくだ　みのる）